



室小だより

茅ヶ崎市立室田小学校
令和3年 5月号
校長 下反達二

学校教育目標「豊かな心を持ち、主体的・創造的に行動する子の育成」

「無私な行い」

1年生の給食がはじまり、学校はますます活気づいてきました。桜はすっかり散ってしまいましたが、春の陽気と緑かおる風が、気持ち良い今日この頃です。

朝の時間、木々の落ち葉や花がらを竹ぼうきでせっせとはいている6年生がおりました。「ありがとう、これって当番の仕事なの」と声をかけてみましたところ、「いえ」彼はそう答え、黙々と手を動かし続けておりました。彼にはそれが、日常だったのででしょうか。「ありがとう」などと少し上から目線で声をかけてしまったことがはずかしくなりました。きっぱりとした清々しいその姿にただただ感動しました。(この朝の光景は幾人かの子どもたちにより現在も続いています。)

数十年前に読んだ「木を植えた人」(ジャン・ジオノ作 原 みち子訳)という本が思い出されます。荒れ果てたフランスの丘陵地帯、そこで生きる五十代半ばの口数の少ない羊飼いとのお会いから物語は始まります。羊飼いは、每晚ドングリ(カシの木の種類)を一つずつ丁寧に調べ、良い実だけを百個ほどより分け、眠りにつきます。よく朝、1.5メートルほどの鉄の棒を携え、荒れ果てた丘に登り、地面に鉄の棒を突き刺して穴を掘ります。そして、より分けたドングリを一つずつ丁寧に、心をこめて埋めていきます。一日百個。毎日毎日。

数年の時を経て、作家は再びこの丘陵を訪れたただただ驚きます。荒れ果てた丘陵の姿はもうどこにもなく、カシの木だけでなく、ブナの木も生い茂り、水のせせらぎに交じり、子どもたちの遊び声が聞こえて……。 (物語はもっと骨太な話なのですが)

訳者の原みち子さんは、あとがきの中でこう述べています。「ほんとうに世の中を変えるのは(中略)静かな持続する意志に支えられた、力まず、目立たず、おのれを頼まず、速効を求めず、粘り強く、無私な行為です。」先の6年生の姿と重なります。

こういった自発的な主体性は、丁寧に育てていかないとやがてしぼみ、姿を隠してしまいます。また、何かを「させたり」、あるべき姿をひたすら「教え込んだり」して育つものでもないでしょう。何よりも必要なのは、自らを受け入れてくれ、自分の話をしっかりと聴いてくれるという居場所です。そして、安心して自らを表現でき、進んで何かしたくなるような場を用意することです。後はひたすら「待つ」。放っておくのではなく、待つ。これは、思いのほか忍耐のいることですが、ここは、我々大人ががんばるしかないようです。室田小には、保護者・地域の方、教職員、そして子どもたちによりその風土が脈々と引き継がれているようです。



懇談会にご出席くださりありがとうございました。

保護者の皆様には、お忙しい中、懇談会に多数ご参加くださり、ありがとうございました。昨年度は、懇談会も実施できず、保護者同志の顔合わせもないままのスタートとなってしまいましたが、本年度は様々なご協力のもと、何とか実施することができ、胸をなでおろしているところです。保護者の皆様には、保護者様同士で交流を深めていただくとともに、担任、我々職員とのチームワークを深めていただき、わが子だけでなく、わが子に加えて、室田小全ての子どもたちの成長のために、ぜひ力を貸していただきたいと強く願っております。